医療戦国時代の始まり？
麒麟がくるか？

札幌市医師会
小原眼科医院
小　原　裕一郎

人工知能（AI）が社会のあらゆる分野に広がっていますが、医療とりわけ眼科分野では、その導入が早いようです。『日本の眼科』91巻第４号総説「眼科におけるAIの現状」によると、マサチューセッツ工科大学の理論物理学教授のテグマークは、life3.0でAIと我々社会の関係について、さまざまな視点から考察しています。その中で、彼はAIの汎用化により、将来消えていく職業の一つに診断医を挙げています。GAFAは現在そして将来の社会の中心になると考えられている企業であり、その資金力やポテンシャルは、すでに国家を超えています。そして、Google社は医療を今後ビジネスの中心にすると宣言しており、28万件の眼底画像を集め、その各個人の情報を紐づけることで、眼底写真だけから各個人の血圧、年齢、喫煙歴まで判定可能の段階まで発展しています。また、アメリカのIDx社は、糖尿病網膜症のスクリーニング機器（**写真**）を開発していて、もうすぐ他の疾患もスクリーニング機能が搭載されるそうです。さらに注目すべき点は、スマートフォンで眼底を撮影して、その結果をクラウドにあげて、AIで診断するシステムの開発も進めています。

『麒麟がくる』第14回放送の「聖徳寺の会見」で、織田信長は、斎藤利政にこう言っています。「鉄砲により世の中も戦も変わりましょう。鉄砲は、百姓にでも撃てる。そして、その鉄砲は、金があれば手に入る」。検査診断システム機器の登場により、診断医が不要になる以外に、必要なクリニックのサイズ、必要な医療スタッフ、さまざまな変化が起きると思います。そして、資金があれば、病院や診療所の運営は、継続することができるでしょう。しかし、診療報酬が、マイナスになっていくと予想される中、投資をどのようにしていけば良いのか？「今までは、こうだった！」という常識が、成り立たなくなってくると思います。

しかしながら、もうしばらくは変わらないと思えるものがあります。それは、手術です。白内障手術、硝子体手術、眼形成手術は、しばらくAIには、不可と考えます。いや、それもただの希望的観測でしょうか？

北海道医報「会員のひろば」投稿募集

◇情報広報部◇

北海道医報では、「会員のひろば」への投稿を募集しています。記事の内容は自由です。医療情勢、診療で日頃から感じること、趣味・紀行、エッセイ、自己紹介等でも可です。

１．記 事 制 限：１記事あたり１ページ以内。
２．文　字　数：600 ～ 1,000字（１段分）または1,600 ～ 2,000字程度（２段１ページ分）
　　※いずれも写真・図含まず。
３．掲　　載：掲載可否および掲載号は広報委員会にて決定します。
４．原稿送付先：ihou@m.doui.jp
５．問い合わせ先：011-231-7661（情報広報部）